

グラビア	地域を支える人 神尾秀樹さん 田所佐和子さん・高知市	1
発掘！地域の希望のタネ	愛知県小牧市 〈小牧山&名古屋コーチン〉	5
給食のじかん	〈飛鳥汁〉 奈良県生駒市	6
書評	水出幸輝 著 『〈災後〉の記憶史』	菅原敏夫 8
焦点	失うばかりの日米貿易協定—求められる自由貿易からの転換	内田聖子 10

特集

## 膨張止まらぬ 二〇二〇年度予算の行方

解説	膨張を続ける二〇二〇年度予算	財政問題研究会	16
解説	二〇二〇年度地方財政計画の概要とポイント	飛田博史	26
	先行き見えぬ財政健全化への道	原 真人	39
	「地方創生」政策の検証 —第二期に向けてどう対応するか	今井 照	46
	新年度予算編成に地方公会計を生かす —持続可能な自治体経営に向けて	中川美雪	59

各県自治研活動レポート	リバークルーズで東京を再発見する旅 —丹南市民自治研究センターとの交流—東京都本部	染 裕之	66
スコットランド便り	●二〇一九年英国真冬の総選挙	小原隆治	68
連載	『月刊自治研』を読む〈第五季〉●「コミュニティ労働」という概念の提起	篠田 徹	77
	自治研センターの機関誌案内		83
	次号予告・編集部から		84



『〈災後〉の記憶史—メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風』  
人文書院、四五〇〇円＋税  
水出幸輝 著

阪神淡路から二五年

毎年一月が近づくと書店に阪神淡路大震災（一九九五年）に関する本が出ていなくなっていく。ここところ新しい本は出ず、既刊も品切・絶版ばかりになっていた。こう毎年災害が続くと阪神淡路大震災も歴史上の災害の一つとして人びとの記憶から忘れられていくのだなあと考えた。ならば忘却に抗いたいと思って、阪神はショックだった。ポラントイ



ア、NPOも登場した。東日本大震災は自分の生家が津波に流されるなど、もつと身近で、恐ろしい体験だったが、それによって、以前の記憶が書き込まれるというのとは違うと思った。自分の災害の最初の記憶は、伊勢湾台風のかすかな記憶であった。そこから出発し往還する記憶を作れないものかとは以前から考えていたのだが。本誌も一月号で特集を組んだ。

伊勢湾台風  
その記憶の銘記と忘れられ方を巡って  
関東大震災にまで遡って（実に）丹念に新聞を繰った書物が出版された。それが本書である。著者水出幸輝は一九九〇年名古屋生まれ。阪神が人生を決めるほどショックだったということはなからう。研究を始めたのは東日本大震災がきっかけではないという。きっかけは名古屋での伊勢湾台風の「伝え方」と学生時代の東京での無関心・忘却。災害の記憶がどんな消費されていってしまう。東京、大

阪、名古屋の災害記事と社説を調べ始める。それが博士論文となり、出版に結びついた。もともと論文なので、スタイルに読みにくさが残る。でも我慢しよう、これは歓迎すべき業績だ。

### 防災の日

九月一日がなぜ防災の日なのかご存知ですか？関東大震災。もちろん。しかし、防災の日が定められたのは、一九六〇年。関東大震災から三七年目、いささか中途半端ではないか。制定の機運はその前年九月二六日、戦後最大の台風被害をもたらした伊勢湾台風に発している。六一年には災害対策基本法が制定。私たちは伊勢湾台風の災後を生きているのだ。九月一日なのは関東大震災もあるが、例年二〇日（立春から二二〇日目。台風に注意する時季）に当たるということも理由だ。ちなみに今年の二二〇日は八月三十一日。（二・一七記）

評者 菅原敏夫 本誌編集委員